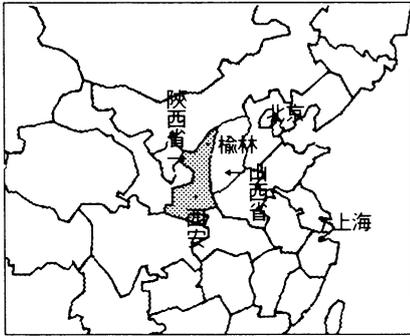


# 陝北の村から… その1

深尾 葉子 (大阪外国語大学講師・GEN世話人)



前回、香港から風水木の保護にまつわるお話を報告させていただきましたが、その後日本に約1年滞在の後、現在はGENの活動拠点である山西省の西隣、陝西省北部の農村に調査のために滞在しているので、今日はそのご報告をさせていただきます。ここはかねてより訪れていた村で、GENの会合でも何度かご紹介している地域ですので、お馴染みの方も少なくないかもしれません。

陝北地域は、山西省と同じく主として黄土高原にあり、窑洞建築を主とする農家が黄土高原の食谷に点在しています。降水量はやはり年間400mm前後で、北の長城線を境に沙漠と草原が交差する地域でもあります。ただ、沙漠

の点在する榆林地区では灌漑農業や羊毛加工業などで比較的豊かな地域が多く、灌漑による水田で米の生産もできるほど恵まれた環境であるのに対し、米脂県や綏徳といった隣接する黄土高原地帯では、小麦の生産もままならず、「小米」と呼ばれるアワやコーリャン、トウモロコシ等が主たる農作物、と山西省とほぼ同様の条件にあります。なかでも黄河沿いの佳県は貧困県のひとつで、むき出しになった岩場の急斜面にわずかに残る黄土に作物を植える農民の姿は、この地域の経済の難しさをひしひしと実感させるものでした。

そうした困難な状況のなかで、数年来豊作続きであったこの陝北地区は、今年近年まれにみる干ばつにみまわれ、数か月間ほとんど雨が降らないために、農民は春の植え付けもできず、乾燥して風に舞い飛ぶ黄土の土を耕しつつひたすら雨を待っていました。そんなとき彼らは「我們是靠天吃飯的、如果天不下雨、我們只好餓死孩子(われわれの生活は天に頼っている、もし天が雨を降らせてくれなかったら、子どもを飢えさせるしかない)」と半ばあきらめた表情で言うばかりです。人民公社

ほ地も夏の集中豪雨でまたたく間に押し流されてしまったということで、今はまた昔と同じ、「天に頼る」生活です。

ところでそんな農民の現在の最も切実な訴えは、幹部の腐敗と社会の不正に向けられていました。少し親しくなると必ずと言っていいほど、地方幹部に対する不満を聞くことになります。そのひとつは、上級の幹部が村にやってきては派手に飲み食いして、村の財政を悪化させていること。しかもその財源は、かつて自分たちが汗水流してつくった「棚田」や「覇田(川の上を埋め立ててつくった畑)」を農民に「売る(実際には有償で貸し出しているのだが、農民は売っていると解釈する)」ことによって得たもので、そうした村政府のやり方にも不正感がのっているようでした。実際にわれわれの滞在中にも、兵役から帰ったという理由で仕事をあてがわれた郷幹部が、昼から白酒とビールを飲んでマージャンに興じているのを何度も目にしました。ちなみに、われわれの滞在する村で、幹部の飲食費(接待費)は年間6,000元にもおよぶということです。これは、一戸あたりの年間収入が1,000元に満たないことの多いこの村で(それでも、山西省より恵まれますが)、大きな負担であることは想像にかたくないでしょう。また、近くの県城では麻薬の売買で昨年多数の幹部が逮捕されるなど、おおよけに問題となっているものだけでも、数をあげればきりがありません。そんななかで、今はぎりぎりのところで我慢をしているが、もう少し深刻化すれば、どうなるかわからない…ともらす農民もありました。

80年代後半に都市で鬱積していたような不満が、90代にはいって、農村の基層部へと広がりはじめた感のある今回の滞在でした。



農作業の手を休め、よもやま話に花が咲く



# 陝北の村から… その2

深尾 葉子 (大阪外国語大学講師・GEN世話人)

前回、近年の状況について悲観的なことばかりを述べましたが、日常的にそういった不満が語られるわけではなく、むしろふだんは農作業とそして村の中でのおしゃべり、そしてときには市に出向いたり、廟で演じられる劇や結婚式などの行事に出向いたり、と人びとは生活を楽しんでいます。もちろんそれは、80年代以降生活が上向いたことと無縁ではありませんが、それにつれて、廟やお祭りも年々華やかさを取り戻しつつあります。

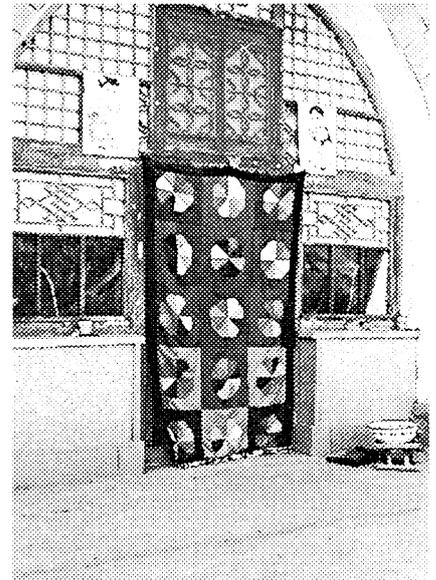
そんななかで、農家のヤオトンに下宿し、生活をともにしながら調査をおこなっているのですが、今回はそこで得たアイデアをひとつご紹介したいと思います。

農家の食事は主として「小米稀飯」というアワ粥と特産のじゃがいもやさつまいもを料理したもの、ときわめてシンプルなものですが、それを食べながらいつも感じるのは、一般に「貧しい」と言われているこうした食事が、身体に大変心地よいことです。これは個人的な体質によるところも大きいかもしれませんが、高カロリー・高蛋白の食事では、食がすすまなかったり、胃がもたれることが多いのに、村に来るといつも食欲が増して、体調がどんどん良くなっていくのです。中国ではこのアワ粥は「養身」といって、消化や吸収が良いため、都市でも病後の人や妊産婦などは、これを食べるといいます。

こうして私も陝北ですっかり「アワ粥」に慣れ親しんでしまい、今回一時帰国の際にも自分用に一袋持ちかえり、

村の人に教えられたとおりに炊いて食べるようになりました。ところが、帰国後報告会をかねて友人たちを自宅に招いた際に、この「アワ粥」をつくってみたところ、これが大好評で、みな日々「こんなにおいしいとは知らなかった!」と新鮮な発見。考えてみれば、歴史上人間と雑穀類のつきあいはむしろ米よりも長いわけで、人間が長く慣れ親しんできた味だったということでしょうか。むしろそういった雑穀類を主とする食事を「貧しいもの」として省みず、高蛋白、高栄養のものばかりを摂取しようとする現代の食生活のほうが異常なのかもしれません。この日は結局アワ粥の試食会となり、そこにいあわせた人たちで、もっと日本人もアワの価値を見直した方がいいのでは、ということに話は発展しました。

そこで提案ですが、山西省で植林をしていることの往復活動として、現地の食生活をこちらでも紹介してはどうか。これから現地とは長いつきあいをしてゆくのですから、植林ツアー班もできるだけ、特に村に滞在している間は、村の人が日常的に食べている食事をともにし、自らの食生活を見直すきっかけとしてはどうでしょう。意外に新鮮な発見やおいしさに出会うかもしれません。アメリカでは、健康食品として高額で売られはじめていたというこの「アワ」。日本でもいまは、健康食品店が小鳥のエサとしてペット屋さんくらいでしか見かけなくなっていました。まずは、手始めにツアー班が持ちかえった「アワ」で「アワ粥」試食会をやってみては?



黄土高原の生活文化紹介の拠点として日本にヤオトンがつくれたら… (陝北の農家)

ちなみに、5月の世話人会では、私の手料理? で試食済み(ただし、そのときは最後に吹きこぼして、少々失敗でしたが……)。

そしてさらなる「夢」は、黄土高原の生活理解の拠点として、関西地区のどこかに「窯洞」をつくって、GENの研修をしたり、生活文化を体験したりする場所を設けること。これはもちろん夢のまた夢ですが、ツアーで窯洞生活を経験した人には魅力ある話だと思いませんか? 「窯洞」研修所で事前研修やツアーの同窓会をし、オンドルの上に座って、かまどの火で炊いた「アワ粥」を食べる……。ただ、それにはまず、地震に強く安価な「日本式新型窯洞」を考案しなくてはいけないかも知れませんね。

(前ページよりつづく) 学校に果樹園をつくる資金援助をしてくれました。これはまたわが国政府が対内的に活発化させ、対外開放の政策をとった成果でもあるのではないのでしょうか。

前後を思うと、私の心には激動が訪れます。1人の小学生として私は、よく勉強し、日に日に向上することを決意しました。自分の2本の手をつかって、祖国建設の事業をより高め、反映

させるためにがんばりたいと思います。

けさ友誼の樹を植えれば、明朝には豊かな結実があるでしょう。

中日両国の平和友好が永遠につづくことを祈ります。